

データレイクを活用してデータ連携範囲を拡大し、  
業界を横断したデータ基盤とすることで、  
サプライチェーン全体を俯瞰した課題解決を可能に

EDIに代表される、BtoBのデータ連携手段は、低速のアナログ回線から高速のインターネットへ進歩してきました。しかし、そのほとんどは直接の取引先間でのデータ送受信という、昔からの考え方の延長でしかありません。

地球温暖化に代表される自然環境の変化、パンデミック、労働力不足、食品ロス対策の必要性等々、私たちを取り巻く環境は大きく変化し続けています。サプライチェーンが効率的で持続可能であり続けるためには、抜本的な考え方の見直しが必要となっています。

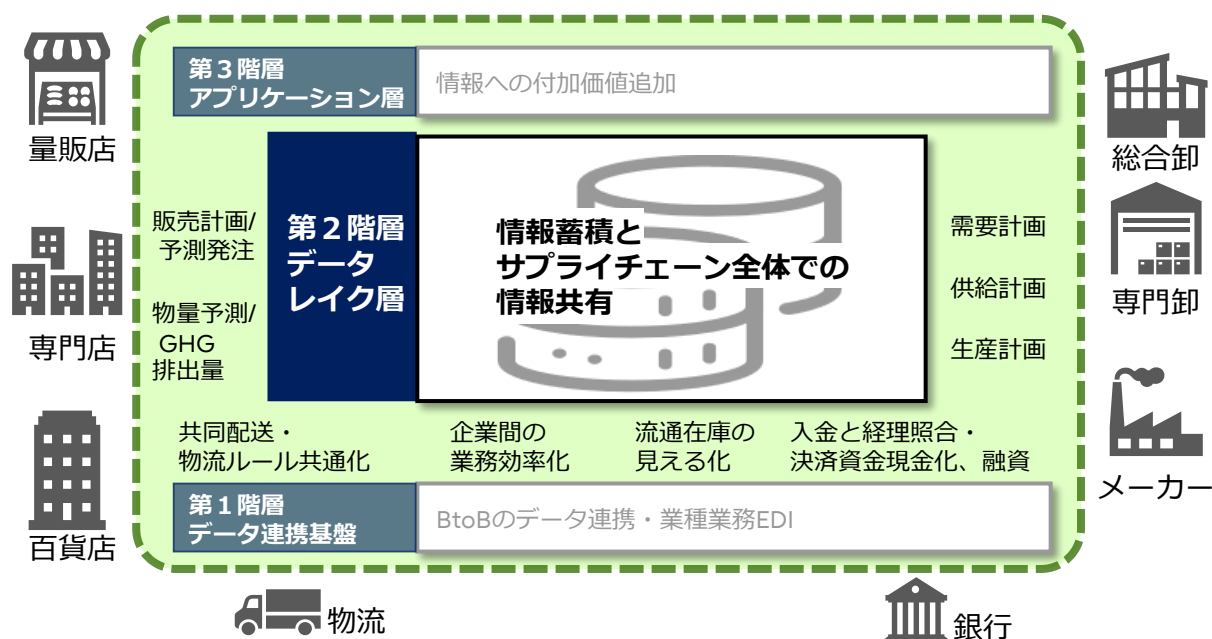
Supply Chain Data Utilizationでは、業務システムの処理結果であるデータを定期的なバッチ処理でやり取りするというこれまでの考え方を見直し、必要な時に必要なデータを、さらに結果に至る過程としての根拠や予測データをも、ステークホルダー間で共有し共用することで、サプライチェーン全体の効率を高め、サステナビリティを高めることを目標とします。データ連携範囲をサプライチェーン全体に拡大し業界を横断したデータ基盤とすることでサプライチェーン全体を俯瞰した課題解決を可能にするためのオファリングです。

## Data Lake Serviceの概要

Supply Chain Data Utilizationでは、データ連携基盤、データレイク、アプリケーションの三階層で構成され、サプライチェーン全域で情報共有することで、社内の効率化だけでなく、サプライチェーンを構成するステークホルダー全体の効率を高めます。

Data Lake Serviceは、Supply Chain Data Utilizationの第2層かつ中核であり、受発注にとどまらず、あらゆる情報を対象としてサービス内に蓄積し、正規化、構造化、業務要件による加工を経た公開用データを作成して、ステークホルダー間で共有することができます。

Supply Chain Data Utilizationの機能関連図と情報共有のイメージ



# Data Lake Serviceの特長

## データの蓄積と標準化

主として受発注データの送受信を行うだけだった従来のEDIに対し、Data Lake Serviceは、あらゆる情報を対象として正規化、構造化、業務要件による加工を経た公開用データを作成し、オフリング内に蓄積します。

サプライチェーンの各プレイヤーは、共有された同じデータを見て状況を判断しアクションに結びつけられます。これにより、各々が自分のデータしか見られないことにより生じる過剰在庫や機会損失を避けることができ、サプライチェーン全体としての効率化を実現します。

## APIによるデータのリアルタイム利用

専用ソフトや外部サービスを介してデータを送受信するEDIシステムでは、業務システムは連携データに直接アクセスすることは出来ず、途中でバッチ処理が必要となってタイムリーな処理ができなかったり、連携先との非同期が生じたりする原因となっていました。

これに対し、APIによる入出力を標準機能として提供することで、Data Lake Serviceは業務システムから直接接続することが可能です。共有するデータをデータレイクに置くことで、サプライチェーンの各プレイヤーは鮮度の高いデータを共用でき、精度の高い処理結果を得られるようになります。

## 外部サービス連携により新たな価値を付加

Data Lake Serviceは、ユーザが格納したデータをそのまま利用するほかに、オフリング外の様々なサービスと連携して公開用データに付加価値をつけて利用し、業務効率を高めることも可能です。例えば外部の需要予測サービスと連携して需要見込み情報を加えてデータレイクに置くことで、サプライヤーはそれを生産計画に反映するといった使い方です。

外部サービスとはData Lake ServiceからAPIで連携するようにするため、相手先ごとに社内システムに連携機能を追加する必要が無く、短期間で外部サービス連携を実現することが出来ます。

# Data Lake Serviceが選ばれる理由

Supply Chain Data Utilizationは、発表以来、様々なお客様から好評をいただいています。一つの理由として、本サービスは40年以上にわたって安定したサービスを提供し続けてきた富士通の業務EDIサービスの延長線上にあり、お客様にとって安心して使用できることがあげられます。これは、SaaSサービスとしてのインフラ面、運用面での安心感だけでなく、これまでお客様の業務改善をサポートし続けてきた富士通のサービスとして、お客様の目線で問題解決をするという姿勢に対する安心感です。

もう一つの理由は、本サービスを構築するにあたり、業種業務ごとの標準化を想定していることです。Data Lake Serviceで標準的に持っているデータレイアウトは、商流情報としての流通BMSと、物流情報としてのSIPスマート物流サービス物流情報標準メッセージに沿っており、これにより、サプライチェーンを形作る各ステークホルダーと容易に情報共有できるよう考慮しています。

他の情報連携方法との比較

EDIと比較して	EDIではデータをそのまま交換するのに対し、Data Lake Serviceでは生データを長期間保存し、 <b>業務で使いやすいように最適化された公開用データベースを作成</b> し、場合によっては付加価値を付けて利用者に提供することができます。
ストレージ共有と比較して	ストレージ共有では利用者は格納されたファイル単位でしかデータを取得できないのに対し、Data Lake Serviceでは、利用者は <b>APIで取得範囲を指定して必要な情報を抽出</b> することができます。
DWHと比較して	Data Lake Serviceはサプライチェーン上の多くのプレイヤーとデータ共有し易いよう、 <b>業種業務ごとに標準化されたフォーマットでのデータ公開</b> を最初から考慮しており、さらにユーザー毎データ毎のアクセス制限により、ビジネスに必要なデータ公開レベルのコントロールが可能です。

## お問い合わせ先

### 富士通株式会社

富士通コンタクトライン（総合窓口）0120-933-200  
受付時間：9:00～12:00および13:00～17:30（土・日・祝日・当社指定の休業日を除く）  
[お問い合わせフォーム](#)

